

# 特別支援学級における一人一台タブレットを活用した授業改善

## ～一人一人が自己の学びを自覚できることを目指した国語科の授業～

小松丸瞭（熊本市立帯山西小学校）

概要：本実践は、自閉症・情緒障害特別支援学級における一人一台タブレットを活用した国語科の授業実践である。実践の中で、特に重点的に取り組んだ点が、振り返りである。毎時間の授業の中で、児童は何かしらの「学び」をしているはずなのに、その「学び」の内実が何なのか、本人が自覚しないまま授業が終わってしまうことがこれまで多かったように感じる。そこで今回、タブレットを活用し、振り返りを工夫することで、児童一人一人が「何を学んだのか」を自覚できることを目指した。

キーワード：タブレット，振り返り，合理的配慮，授業のユニバーサルデザイン

### 1 はじめに

近年学校現場において ICT 機器の整備が急速に進められており、それらを活用した今までにない学びの在り方が可能となってきた。特に本市の特別支援学級に在籍する児童には、平成30年度より一人一台のタブレットが配当されており、合理的配慮に基づいた ICT 機器の活用も可能となってきた。本実践では、タブレットを授業で断片的に使用するのではなく、様々な場面において、児童一人一人が継続的にタブレットを使用して、学びを深めていくことができるように授業改善に取り組む。

また、中教審の答申（平成28年）によると、「学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができるようにすることが重要」と述べている。しかし、特別支援学級に在籍する児童の多くは、自分の様々な苦手さから、なかなか自分の学びを自覚できていないことが多いように感じる。そしてその積み重ねが更なる苦手意識につながったり、自己肯定感の低さにつながったりしているとも考えられる。そこで今回、タブレットを活用し、振り返りを工夫することで、児童一人一人が「何を学んだのか」を自覚できることを目指した。そして、振り返りをお互いに共有できる場を継

続的に設定し、児童一人一人が授業を通しての自分自身の成長を実感できるようにした。

### 2 子どもたちの実態

本学級は自閉症・情緒障害特別支援学級であり、5年生男子3名、女子3名の計6名が在籍している。全体的に自分の意見を発表することにとっても意欲的な児童が多く、お互いに協力して何かを作ったり、遊んだりすることが大好きである。一方、書くこと・読むことへの困難さがある、集中がなかなか続かない、文章や資料など情報量が多くなると混乱してしまうなどの困り感を抱えている児童がいる。また、全体的な傾向として、振り返りの際に何を書いて良いか分からずに、止まってしまうことが多い。

### 3 単元について

本教材「和の文化を受けつぐ-和菓子をさぐる」は、日本の伝統的な文化の一つである和菓子を題材としており、序論・本論・結論の構成がとても分かりやすい文章である。また、文章だけではなく、様々な写真や図表などの資料が説明に用いられているのが特徴である。本単元の目標は二つである。一つ目は、文章と資料を結びつけるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えることができる、二つ目は、

目的に応じて資料を活用し、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して書くことができるのである。

そこで児童の実態を踏まえ、上記の目標が達成できるように、文章や写真を必要に応じて区切って提示したり、より相手を意識した見せ方や伝え方を児童が考えることができるように、単元の最後にニュース番組を設定したりするなどの工夫をした。

#### 4 授業の実際

##### (1) 目的意識をもって学習に取り組むことが

###### できるようにするための工夫

児童が目的意識をもって学習に取り組むことができるように、単元の最後に「ふれあいわくわくニュース」というニュース番組を撮影・編集するという学習活動を設定した。よりリアル感を出すために、児童には「アナウンサー」、「司会」、「コメンテーター」の役職を自分の発表以外の時には輪番で担当させることにした。また、今回は児童の実態を踏まえて、序論・本論・結論の構成を分かりやすく示した発表原稿を作成した。序論・結論部分は、穴埋め形式で全員共通の話型にし、本論でより自分の伝えたい資料を作成できるように焦点化を図った。また完成したニュース動画は、保護者にも見てもらいコメントをもらうことにした。そのような明確な学習課題・学習目的を設定したことで、児童は、自分の発表をより良いものにしたい思いが掻き立てられたようだった。例えば、本番を迎えるまでに自分の原稿を自主的に何度も読み返したり、友達のプレゼンの良い所を自分のプレゼンに真似したりする姿が多く見られた。

##### (2) 深い学びを生み出すための振り返りの工夫

###### ① タブレット版振り返りシートの作成

本学級の児童の中には、振り返りをする際に、書くことにはかなりの労力がかかり自分の思ったことを全て書き記すことが難しい児童や、何を書いて良いか分からずに鉛筆が進まない児童が

いる。そこで、今回は、手書き入力や音声入力、キーボード入力といった様々な方法が選べるように、タブレットでの振り返りを行った。そうすることで、児童はそれぞれの得意な文字入力の選択肢を選び、結果として自分の思いや考えを表出しやすくなることをねらった。

また、何を書いて良いか分からずに止まってしまう児童への手立てとして、振り返りの視点を明確にした。振り返りの視点を考えるに当たっては、学習内容についての視点、学習方法についての視点、人間性の涵養の視点を参考にし、「初めて知ったこと」、「できるようになったこと」、「友達の良かったところ」、「もっと調べてみたいこと（気になること）」の4つの視点を明示した。(図1)

図1 タブレット版振り返りシート

###### ② 全体を俯瞰して振り返る

毎時間の振り返りと同時に、単元を通しての学習を視覚的に理解することができるように、熊本市のタブレットに導入されている学習支援アプリ「ロイロノート」のシンキングツール「プロット図」を活用した(図2)。そのプロット図上には、教師が児童と共に作成した毎時間のまとめシートと児童の振り返りシートを載せた(図3)。そして必ず授業の始めと終わりに、学習を振り返る時間を設定し、児童一人一人に「何を学んだのか」を自分の言葉で振り返らせ、お互いの学びを認め合う雰囲気を高めた。

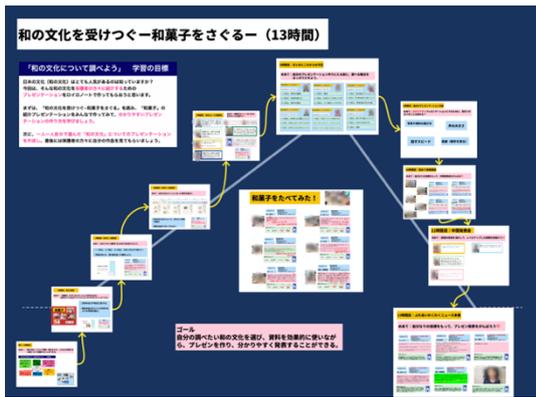


図2 全体を俯瞰して振り返りができる工夫

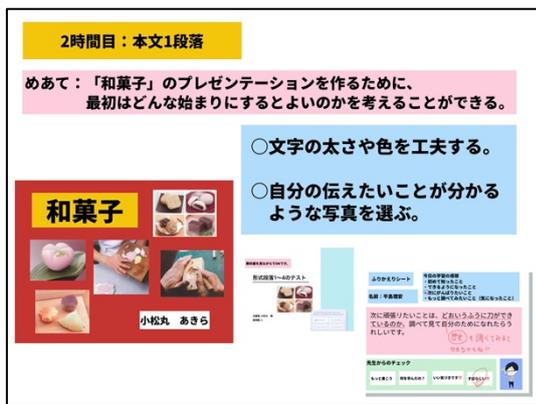


図3 毎時間の学習シート (例)

## 5 考察

今回、タブレットを活用した振り返りの方工夫を実践したことで、児童の振り返りの記述内容と量に変化が見られた(図4)。その変化には、二つの要因が影響していると考えられる。一つ目は、振り返りの視点がいつもシートに明確に示されていたことである。そうしたことで、何を書けば良いか分からなくて困っていた児童が、書き始めるきっかけになり、更には、いつもは一文で書き終わっていた児童が、回数を重ねるにつれて、より多くの視点で自分の学びを振り返ることができるようになったと考えられる。二つ目は、タブレットを活用したことで、手書き入力や音声入力、キーボード入力といった多様な文字入力の方法が増えたことである。つまり、児童はそれぞれの得意な文字入力の方法を選べたことで、自分の考えや思いを簡単に表現することができたと考えられる。

また、タブレットを活用した振り返りを行な

ったことで、教師が想定しなかった振り返りの内容が見られた。教科書の本文を読み、「和菓子には、昔からあるお菓子と新しくできたお菓子がある」ということに気づいた児童は、記述での振り返りだけに留まらず、自分が気になったことをインターネットで調べて、その調べた内容を写真を添えてまとめていたのである(図5)。自分の調べたいことをすぐに調べることができるタブレットの良さが出た場面であった。

また、今回の授業を機に、授業以外でも自分でプレゼンを作りたいという児童が出てきた。そこで、タブレットを家に持ち帰らせ、プレゼンや動画作りを宿題に出すことにも挑戦してみた。児童は、自分の気になるテーマを選び、必要に応じて、写真や資料を選びながらタブレットでまとめることができていた。そして作成したプレゼンは、朝自習などの時間を使ってみんなの前で発表する場を設け、その後、感想交流を行った。

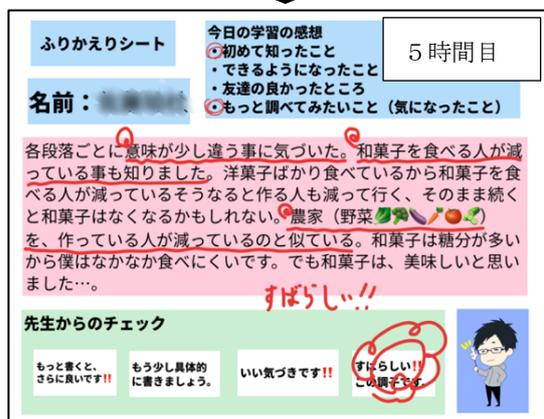
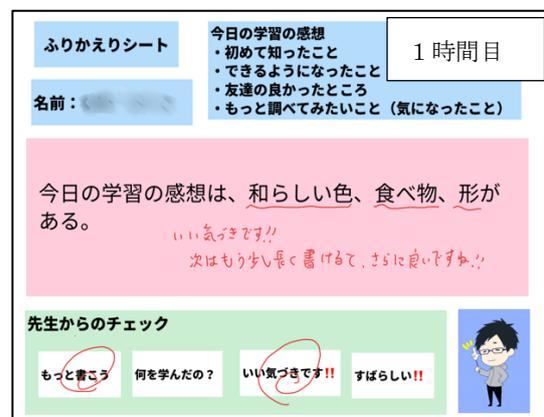


図4 変容の大きかった児童の振り返りシート

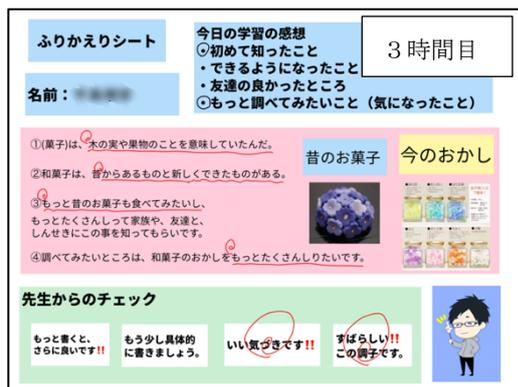


図5 更に学びを深めた振り返りシート

## 6 課題と今後の取り組みについて

本実践では、児童一人一人が自分のタブレットを使って、インターネットから調べたいことを探し出しまとめる活動を行ったが、予想以上に苦戦していた。特に今回は、児童の調べる観点に選んだものが「歴史」に関連したものが多く、どうしても難しい言葉が使われている資料を読み解く必要があったことも要因の一つと考えられる。今回は、授業の中で個別に用語の説明をしたり、難しい表現を分かりやすく言い換えたりして、児童の理解を促した。しかし、教師が手助けをし過ぎると、児童は一向にインターネットの上手な使い方を学ぶことはできない。小学校学習指導要領（平成29年告示）では、「各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。」と述べられている。つまり、情報活用能力は、学習の基盤となる資質・能力であるとともに教科横断的な視点で育成される必要があるということが分かる。

このようなことも踏まえ、今後も様々な教科で積極的にインターネットを活用した調べ学習の場を設定し、調べた情報を整理したり比較したりする学習を行うことで、情報に対して主体的に関わることができる児童の育成を目指していきたい。

## 7 おわりに

本実践は、特別支援学級での実践であったが、通常学級での授業にも生かせる点が多くあると考える。GIGA スクール構想により、通常学級の児童にも近い将来一人一台タブレットを持つ環境が整う。今後はその環境下のもとで児童が学習する時に、タブレットに対する認識を児童も教師も変えていく必要があると考える。つまり、タブレットは特別な道具ではなく、鉛筆やノートと同様に学習の道具の一つであるということである。合理的配慮の視点からLDのある児童・生徒へのICT機器を活用した先行研究（近藤2016）では、学校でのICT機器の利用による読み書き障害事例に対する合理的配慮の具体的な方法とその考え方を整理している。その中で、タブレットが読み書きの困難さを手助けしてくれるツールの一つになることが示されている。

また、特別な支援が必要な児童・生徒を含めて、通常学級の全員が、楽しく学び合い『わかる・できる』ことを目指す授業のユニバーサルデザインの視点においてもICT機器の活用は効果的であると考えられる。例えば、ICT機器を活用した写真や動画の提示は、児童の視覚的な理解を促進する。自分の意見を友達と共有化するに当たっても、ICT機器を使えば、短時間でたくさんの人と共有することができる。

これらのことを踏まえ、今後は合理的配慮の視点と授業のユニバーサルデザインの視点のもとにICT機器を活用した授業改善を行なっていくことが必要であると考えられる。

## 引用文献・参考文献

- 小学校学習指導要領（平成29年告示）  
 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年）  
 近藤武夫（編）（2016）. 学校でのICT利用による読み書き支援—合理的配慮のための具体的な実践 金子書房